論理の規準を見出すべきであつたのではあるまいか。

かの自然科學的機械科學的技術者は、かの空論的インテリゲンツの群に追込み、彼等と共に憂鬱ならしむるには餘りにも未來的であり、彼等と共に小兒病的たらしむるには餘りにも忍苦的である。彼等は彼等の函數計算表より利潤要素を消去すれば、直ちに洗はれたるグラフを準備することの出來る「可能性」である。

論理はかの社會科學的立脚地に立つよりも、もつと技術科學的立脚地に立つべきではないかと思はれる。この事は著者の論理の政治的傾倒について、寧ろ科學的反省をうながすものあるかを思はせるものがある。

辨證法への餘りにも多き關心が拂はれつゝある現代哲學も又その反省をわかつべきでもあらう。

ともあれ、爭鬪の中間に躍入することは、爭鬪そのものよりも忍苦を要求することがある。しかも現代に於てこの忍苦は尊い忍苦の一つでなければならない。著者がその最も困難なる部署についた事は何れの側よりも同感されなければならない何物かをもつてゐる。その意味で本書は獲がたき一つの事實であると共に、得られたる興味ある論理でもある。（紹介者　中井正一）

アレ并イ「ニイチエ傳」（新潮社刊）

生田　長江
野上　巖共譯

前世紀の最後の夏にその足跡を印し、今尙ほ吾々に生々しき印象を起さしめるまでに強く、いたましき生涯を描いて行つたフリードリヒ・ニイチエは、あたかも彼の苦惱の生涯の故に孤獨の哲學者の故に、その超人の思想の故に、大部分がロマンテイカーであつた所の吾が國の學徒の間では迎へよろこばれたかのやうに思はれる。現實の生產社會的生活とは何の交渉もなく、ゆとり多き環境の内にあつて貴族的な傾向に走つて居た彼等の中に在つてはひとりの生活が問題であり、ひとりの體驗が絕對であつた。そこに於ける最初の衝動はゼーンズフトとしてあらはれ哲學はエロスとして規定された。エロスは翼を持つ。理想主義的乃至は人格主義的見解が等しく世を風靡したのは偶然ではない。そしてニイチエの所謂「距離の熱情」が恰も哲學者の體面であるかの如き觀を呈した。かうした雰意氣の中にニイチエは何の批判をも受げることなく迎へよろこばれて居た樣に思へる。しかし時代は流れる、歷史は必然的に吾々の觀點を規定する。嘗てひとりの存在を問題としそれの欠如感に惱んだロマンテイケル・ニイチエに對して今は全體社會としての存在が拒否されて居るのを吾々は知つて居る。而も、それはロマンテイカーとしての體驗ではなしに現實の問題としての。

ロマンテイカーにあつてはそれへの戰ひは距離の熱情としてあり超人としてあり得たかもしれぬ。然し全體としての存在拒否は寧ろマツセとして感ぜられ、ニイチエによつて鼓舞された戰ひと勇氣とはまた別の意味を擔はねばならなくなつた。彼が隣人愛よりも一層高く評價した所の戰爭と勇氣とは、そしてまた彼が、それのためにこそ凡ての民衆は奉仕の熱愛にひたられねばならぬと

説いた天才と超人との思想は結局前世紀末から今世紀に亙つての彼の彪大なる權力主義に益々その基礎を強固ならしむるの確信を與へたに過ぎなかつた。否、その影響こそ實に輕々に見逃すべからざるものとして今吾々の眼前に横たへられて居る。彼の權力主義こそ將に批判さるべきの秋にある。

更にまた文學に於ても彼は十九世紀のロマンテイスムスを窮極にまで追ひ込んだかの感がある。ルツター、ゲーテ以後に殘されたる最後の歩みを彼は完全に歩み盡したと自らをして語らしめて居る。そして象徴主義をして彼の詩的創作の最後の頂點たらしめて居る。

何れにしても彼は時代を物語るよき類型である。そしてその影響の偉大なるが故に吾々の批判もまた注意深くあらねばならぬ。

而して一個の思想家、藝術家をその時代に於ける史的必然性を以て正しく理解せんには、何時の場合でもさうである如く、その人物、時代、勞作に於て先づその人間の全風丰を把握せねばならぬ。殊に自ら體系を有つことを欲せず、存在の、概念の内に解消されることを恐れた彼ニイチエの場合にあつては猶更その生けるレーベン自體の理解が何よりも先立つて意義を有つのではあるまいか。この意味に於て生田・野上兩氏譯になるアレギイのニイチエ傳は新しき意味をもつて吾々に讀まれることを要求して居る。もとより此の書は生活、作品と性格との忠實なる描寫であり、傳記としての域外に出ることを禁じられてある、而も尚多くの批判を讀者に訴へて居ることを認めぬわけに行かぬ。新しき時代に關心をもつ譯者が一個の對象を新しき科學の前に訴へる時そこには多大の勞苦と注意とが支拂はれねばならぬ。この書が傳記であり乍ら而も單なる傳記以上の何物かを訴へやうとして居ることは注意深い讀者には容易に氣付く所であらう。吾々はこの卷末に掲げられた年表の勞を多としなければならぬ。

とまれこの一篇は香り高きニイチエの風格を寫すに適はしき筆を以てその生活を忠實に描き出すと同時に、各時代の作品、人物書簡等悉く之を網羅して盡さゞるなく在來の流布本を茲に一掃したるかの感がある。この意味では最初的にして且つ最後的な書であるといへやう。ニイチエを知らんとする者にとつてはよき手引であり、嘗てニイチエを憧れし人々にとつては更によき理解を深めるものであらう。章毎の精密なる註釋と、卷末の文獻表とはこれらを首肯せしむるに充分である。

この全篇を通じて親しくニイチエの風格に接した人にはその人のもつジンの深さと視野の大きさに準じて更に大きく深く彼の文藝上、思想上に殘した影響の偉大さを反映することが出來やう。

（難波浩紹介）

寄贈雜誌新聞

哲學雜誌	昭和五年七月	第五二一號
丁酉倫理會講演集	同　七月	第三三三號
眞宗研究	同　七月	第三四號